

## 特集 ご存知ですか？ SOSサインのことを。

2016年8月、東京メトロ銀座線青山一丁目駅にて盲導犬を連れた視覚障害者がホームから転落。進入してきた列車と接触して死亡する事故が起きました。

この事故を契機に、JRや東京メトロ、私鉄各線などで、視覚障害者の安全を守る取り組みが進められてきました。通勤や通学の途中で、視覚障害者を誘導する駅員を目にし、駅利用者に声かけを呼びかける案内放送を耳にした機会をお持ちの方も多と思います。

ホーム上の安全を確保するためにホームドアを設置することが急務の課題ですが、まずは身近にできることからの取り組みとして、駅員が誘導して駅構内を移動したり、駅利用者に視覚障害者に対する配慮を求めています。

ところで、視覚障害者の側から周囲の人たちに向けたSOSサインがあるということ、皆さんご存知でしょうか？



立ち止まって、白杖の白い部分を胸前くらいの高さを持つこの姿勢。

順調にそれまでは歩いていたはずなのに、誰かとぶつかって方向が変わって目的地にたどり着けなくなってしまった…、というような緊急事態に、視覚障害者の側から発せられるサインです。

緊急事態は駅を利用しているときだけ起こるものではなく、街中の歩道上でも起こりえます。皆さんの身近で、このような姿勢をとって助けを求めることは、十分にありえます。

視覚障害者支援センター熊谷では、JR熊谷駅コンコースを歩行訓練で歩いているときに、利用者の了解のもと、このSOSサインを試してみることにしました。

担当した職員によると、「北口から南口へと点字ブロックを歩いているときに場所が分からなくなったと想定して、SOSサインを実施。訓練当日の駅利用者は、それほど多くはなく、しかも、利用者の周囲には人がいなかった

ために、気がつく人もいなかった。周囲に訴えかけることは難しかった」と話していました。

視覚障害者の側から「すみません」と、一声上げればそれですむのではないかと、思われる方もいると思います。しかし、どこに誰がいるのかが分からないため、助けを求める声が虚しく響くだけ、という事態が起こるのです。それが視覚障害の難しさなのです。

そこで考え出されたのが、このSOSサインです。しかしながら、このサインも誰かに気づいてもらえなければ、実効性はありません。ですので、このような状況を見かけたら、積極的に声をかけてください。そして、何に困っているのか、解決するためにはどうすればよいのかを、尋ねてみて下さい。そうすれば、「じつは、改札口に行きたいんだけど、方向が分からなくなってしまった」といったように、困っている内容を具体的に伝えてくれます。その内容に即して支援して下さるとありがたいですし、難しいことはありません。

また、このようなSOSサインを、視覚障害者の全員が知っているわけでもありませんので、困っていても、サインを発せない場合もあります。ですので、サインを発していなくても、困っているのだなと思ったときには、どうぞ積極的に、「どうですか？」「お手伝いしましょうか？」と言った具合に声をかけてください。必要がなければ「大丈夫ですよ」と伝えてくれるでしょうし、「下りのホームに行きたい」などと支援して欲しい内容を伝えてくれることでしょう。

晴眼者が何でもやる必要はありませんし、視覚障害者も何でもやってもらいたいわけではありません。必要な分の支援を受けられればそれで良いのです。そう考えると、もっと気軽に声をかけられそうじゃないですか。

互いに居心地の良い空間が出来上がると、いいですね。

## 特集2 見えないとは？

### 目が見えないとは

視覚障害、もしくは視覚障害者と聞くと、どんなことを想像しますか？全盲・真っ暗・何も見えない。黒い大きなサングラスをしている人、白杖や盲導犬を連れている人…などが思い起こされるでしょうか？

私たちは朝目が覚めると夜寝るまでの間、見える世界を生きていきます。健康な人であれば、朝起きてすぐに見えることの意義について考えることはないと思います。それくらい見えること・見えていることは、当たり前のことなのです。

### 目が見えないということを想像してみる

目を休めるつもりで1分間目を閉じてみましょう。目を閉じてみると、どうでしょうか？視界が暗くなり、何も見えず、音だけが聞こえるばかり。音が聞こえてくるだけ。すると、周りで行われていること何なのか、気になりませんか。気にはなってもここで目を開けずに、我慢します。すると、自分だけ取り残されたような気になってもどかしさが募り、不安や孤独に襲われる…、などが体験できるのではないのでしょうか。

それでは目を開けましょう。この状態が1分間だけでなく、1日24時間、1年365日、生きている間続いていく、ということ想像してみてください。

### 見えている世界、見えていない世界

TVの健康番組で、「緑内障になると、周辺から視野が欠ける」なんて聞いたことありませんか？周辺から視野が欠けるということは、見える世界が狭まることを言います。

見えている世界がごく限られた範囲であり、必ずしもピントがあっているわけではないので、歩く速度は遅くなります。なぜなら、足元や段差、横をすれ違う人などが見えないために分からないからです。

逆に、中心部分で物を見るとゆがんでしまって見えにくい場合もあります。このような場合、視線をずらして物を見るようになります。上目遣いで相手を見るようになると、そんなつもりはなくても、誤解されることがあります。

これらのように、視覚障害と言っても、全ての人が全盲で、何も見えない世界を生活しているわけではありません。ピントが合わずに文字がぼやけて見える人、白くかすみがかかって常にもやの中に見える人、晴れた日は眩しくて見えにくい人…など、どのような病気で、目のどの部位に病変が現れているのか、どの程度まで病状が進んでいるのかなどにより、見え方に様々な違いがあるのです。

### 視覚障害者に接する時

特集1でも触れましたが、街中で視覚障害者がいて、困っているようだったら、まずは「お手伝いしましょうか？」と、一声かけてみてください。何に困っていて、どうして欲しいかを伝えてくれるはずですよ。視覚障害者が望んでいるその希望に沿うように、接してください。

もしかしたら、「大丈夫です」と、助けを必要としていないこともあるかもしれません。しかし、それは「今この状況では助けを必要としていない」というだけで、別の場面では助けを必要としているかもしれません。違う場所では、別の視覚障害者と出会うかもしれません。その時に、また困っているようであれば声をかけてみてください。助けを必要としているかもしれないからです。

社会は誰かのための一方的な場所ではありません。お互いにとって居心地の良い場所にしていきましょう。

